



豊中市教育センター  
〒560-0033 豊中市蛍池中町3-2-1-600  
TEL 06-6844-5290  
FAX 06-6840-8127  
平成24年(2012年)2月1日第53号

## 問いかけ

「もし一日が25時間だったら、余った1時間を何に使いますか」詩人の谷川俊太郎さんの33の質問の一つに、このような問いかけが含まれています。「趣味のスポーツや読書を楽しみたい!」「締め切りの迫った仕事を少しでもやりたい。やらないと!」「とりあえず、睡眠。ゆっくりしたいよなあ。」いろいろな答えを想像しますが、中にはどうしていいかわからないという人もいるかもしれませんね。いずれにしても、その答えには、その人なりの個性や生活の様子があらわれそうな気がします。

以前より授業において、子どもへの「問いかけ」「投げかけ」「揺さぶり」がとても大切であることが指摘されています。質問をうまく活用することで、子ども自身の気づきを促し、主体的な学びにつなげることができます。またコミュニケーションスキルのひとつとして、子どもの視点を大切にし、子どもたちの言葉を引用しながら、子どもの受け止めを深めることができます。問いかける内容やタイミングが的確であれば、子ども自身がさらに気づくことが多く、興味、関心がぐっとひろがり、眠っていた才能が呼びさまされるかもしれません。

自分自身を振り返ってみると、「わかりましたか」「いいですか」などと、抽象的で広がりがない質問を連発していたことを思い出し赤面してしまいます。その中で、子どもたちに投げかけたはずの問いかけや、引き出された答えや意見、感想によって、教員としての自分自身が問われていることに気づき、答えに迷い、悩むこともしばしばありました。

33の質問にはこうしたものもあります。「いま一番自分に問うてみたい問いはどんな問いですか」自分のこだわりや、体の真中を貫いているものを問われるような鋭い質問にドキッとします。その答えの中には、自分が大切にしてきたもののために、あるいは自己実現のために、今自分がやるべきこと、一歩踏み出すべき方向が示されているにちがひありません。

もし、今日の日が25時間なら、残りの1時間はそんな立ち止まりに、自分自身への問いかけに使いたい、そう思う今日このごろです。

(野村)

## ☆サイエンスツアー「丹波竜の化石発掘体験」

1月7日（土）に兵庫県丹波市に恐竜化石や地層の学習を深めるために行きました。

当日の参加者は小学生21名、中学生3名、保護者15名、合計39名でした。

午前中は丹波竜化石工房「ちーたんの館」で、恐竜の化石の第一発見者の方から発見当時の様子を説明していただきました。ちーたんの館では壁一面に原寸大の丹波竜の骨格図を表現しており、現在丹波竜の化石がどこまで発掘されているかが一目で分かるようになっていました。

午後からは、発掘現場の見学と化石発掘体験を行いました。化石発掘体験はこぶし大の石を金づちで



軽くたたいて割ってその表面を注意深く観察して調べます。約1時間体験した結果、子どもたちは15個の化石を見つけました。今回は3割5分の確率で発見され（通常は約1割程度だそうです）とくに竜脚恐竜の歯（長さ2cm）の大変希少な化石が見つかり、担当の方もとても驚かれ、見つけた子どもは大変喜んでいました。

1億年前の恐竜や小動物の小さな生物の化石をたくさん見つけ、子どもたちにとって自然科学の分野に興味を持ってくれることにつながればと思っています。

## ★サイエンスフェスティバルで南部陽一郎賞を創設！

今年で7回目を迎えたサイエンスフェスティバルを1月21日（土）に蛍池ルシオーレビル(教育センター、蛍池公民館、ホール)で開催しました。来場した約650人の市民が、参加16団体のそれぞれに工夫されたブースやサイエンスショーを楽しみました。豊中からは、第三中理科部、第四中と第十一中自然科学部の皆さんがブースを開いてくれました。



今年、ノーベル物理学賞を受賞された南部陽一郎先生が昨年10月に豊中市の名誉市民となられたことを記念して、南部陽一郎賞を創設しました。これは当日市民、とりわけ子どもたちに最も科学のよさや有用さをアピールした団体に贈られる賞です。当日は南部先生ご自身も来場され、ひとつひとつのブースを回って、出展者の説明を聞いておられました。来場者の皆さんと南部先生による投票の結果、第1回南部陽一郎賞は、西野田工科高等学校「いきものがかり」に決定しました。

いきものがかりの皆さんは、ホタルの生態を調べ、東日本と西日本では光り方が異なることなどを説明して、参加者が発光実験を楽しめるように工夫されたブースを開き、受賞につながりました。

教育センターには、南部先生の著書や先生の研究に関連する書籍を配架して特設コーナーを設置しており、先生の功績や深遠な素粒子の理論に触れていただくことができます。先生は市内にお住まいですので、子どもたちにも偉大な科学者が身近におられるということを知ってもらえればと考えております。（情報・科学グループ）



## ☆1月6日（金）に『研究協力員報告会』を実施しました！



1月6日（金）に、豊中市研究協力員報告会を実施しました。

内容は、4つの研究員会からの報告と、2回にわたって福井市立小中学校を視察した『確かな学び推進事業』報告、奈良教育大学 小柳和喜雄教授の『活用力の育成をめざした研究および授業づくりとは』をテーマとしたご講演でした。

今年度は分科会形式とし、小学校国語、小学校算数、小学校道徳、小学校外国語活動・中学校外国語の4つの研究員会からの報告がありました。各研究員会からは、研究授業を中心としてどのように研究を進めたか、授業を展開する際の具体的な手法にはどのようなものがあるか、教科を通した小中連携とはどのようなものかなど、工夫をこらした報告がありました。

「確かな学び推進事業」としての福井市立小中学校の視察報告では、研究協力員を代表して、小学校算数の吉梅耕平先生（蛭池小学校）、中学校外国語活動の富永尚志先生（第十六中学校）から報告がありました。福井市立麻生津小学校、至民中学校の実践から学んだこと、特に教科研究から学校改革につなげた取り組みや縦割り集団から生徒の「生きる力」を育てる取り組み等について具体的な報告がありました。

小柳和喜雄教授のご講演では、要約集に掲載された各研究員会の報告にふれていただきました。研究スタイル、問い・課題・見通しの明確化、説得力、活用に関わって等分析を加えていただき、ご講評いただきました。また、今年度の研究のまとめとして、教育研究の方向性や現

状分析の方法、活用力の育成について、取組みをこれからの校内の研修に生かすための方向性など、幅広い内容でご講演いただきました。

参加された先生方からは、「自分の研究方法を見直すきっかけになった」「大阪府の学校のことしかわからない中、他府県や市の実践はよい刺激になった」などの感想が聞かれました。

各研究員会では、4月より研究授業の積極的な実施や新学習指導要領に向けての研究を推進してきました。

今後も、豊中の子どもたちや先生方のために身近なところから研究を進めていただき、ぜひとも発信していただけたらと思っています。

### 《参加者アンケートから》

・講師の先生の話で前回（5月）の話が復習され、改めて3学期の意欲につながった。また、他の教科の報告を聞いて、自分の教科の研究方法も見直すきっかけになった。

（小学校 6～10年目）

・小学校低学年（2年生）の授業は普段見ることがないので、とても興味深かった。子どもたちの言語活動が活発であったのが印象的で、板書の丁寧さなどは中学校でも参考になった。教える側が子どもたちにどのような力をつけてほしいか、明確にゴールをもって授業研究をしていく大切さを再確認した。

（中学校 6～10年目）

・報告では、両方とも1学年の発表だけではなく他学年にわたった内容を学ぶことができよかった。特に、学年ごとに学ぶ内容が変わるのではなく、学年が上がってもつながっている（前年度の学習が大切である）ことが実感できた。

（小学校 1～5年目）

「確かな学びを豊かな学びへ！」  
教育センターをぜひご活用ください！



気になる子どもへの支援のヒントより

## これって虐待？ —子ども編—

3学期は、子どもたち一人ひとりの様子や生活背景が見えてきた時期ではないでしょうか。Cさんは何事にも消極的で表情が暗く、クラスの中でも存在感が薄く感じられ、担任の先生は気になっていました。どのようにCさんに関わっていけばよいかを考えてみたいと思います。次のような視点からCさんの様子をよく見てみましょう。

対人面	身体面	生活面	情緒面
先生や友だちとの関係は？	身体の発育は年齢相応？ 虫歯が多い？	基本的な生活習慣は身についているか？ 遅刻・欠席の状況は？	感情が急変しないか？ 自己評価は？

Cさんは、身体や衣服の汚れ、給食の食べ方などで特に目立つ様子はありますが、家庭からの連絡のない遅刻が多く、午前中は時々ぼーっとしています。授業で積極的に手を挙げて自ら発言することは少なく、楽しく取り組んでいる様子が見られません。休み時間は、担任の先生に関わりを求めてくるかと思うと、用事を頼んでも無視してしまうなど、人との関係の持ち方が不安定です。Cさんに話を聞くと、「つまらない…何をやっても上手くいかないし…」と自己評価が低く、自信がないことがうかがえました。

支援の手立てとして以下のことが考えられます。

### ① 子どもの日常生活について情報を得る

まず「あなたのことを心配している」ことを伝え、子どもの気持ちに寄り添い、丁寧に話を聞くことが大切です。子どもは不適切な養育など虐待的な状況に置かれていても、自分が悪いからだと考えて話そうとしないことがよくあります。「昨日の夕食は何食べた？」「宿題が分からない時は、家の人に聞くの？」など、子どもの日常生活について尋ねてみると良いでしょう。

### ② 子どもへの対応

良いところに注目し、困り感に寄り添い、まずは大人との1対1の安心できる関係をつくりましょう。情緒が不安定で、勉強や行事にスムーズに参加できない時には、できることから取り組んでいきましょう。そして、頑張ったことをしっかりと褒めましょう。

### ③ 事実確認を行う・先生間での情報共有を行う

担任の先生一人で抱えこまずに、学年や管理職、保健室の先生などとも連携しながら、子どもへの対応を考えていきましょう。複数の目で見ることによって、より多くの情報を得ることができる場合もあります。

☆虐待が疑われる場合は通告の義務があります。管理職にすみやかに報告しましょう。

虐待は、学校での日々のチェックが早期発見につながります。一見して虐待が疑われると分かる場合もあれば、分かりにくい場合もあります。次号では保護者と協力して子どもを支援する方法を取りあげます。 (金光)

参考：『気になる子どもへの支援のヒント—相談事例集—』 p 66 67 68  
大阪府教育研究所連盟 教育相談部会編 豊中市教育センター 2009年3月発行

